

4. ホールの計画づくりの流れと基本スタンス

最後に、これまでの検討結果のまとめとしてホールの計画づくりの流れを再整理した。図表Ⅱ-3は、運営計画・事業計画(ソフトウェア)、施設計画・建築計画(ハードウェア)、検討準備体制・組織づくり(ヒューマンウェア)の三つの要素に分けて、ホールの計画づくりの一般的な流れをフローチャートとして整理したものである。この図を見れば、運営計画、施設計画それぞれでどのような項目を検討・準備しなければならないか、相互の関係はどうなっているのか、そしてそれらを検討・準備する際に専門家や市民にどのように協力を求めていくか、といったことを、計画着手時に十分に把握しなければならないということが理解されよう。

ただし、この図に示したのはあくまでもひとつのモデルであり、ホールの計画づくりの一般的な流れを理解するために整理したものに過ぎない。今回の調査で計画づくりの成功例と思われるホールでも、何らかの運営上の課題を抱えているというのが現状である。このことは、ホールの計画づくりに決まった正解はないことを物語っている。つまり、計画されるホールの目的や活動内容、環境条件が違えば、その数だけ望ましい計画づくりのあり方が存在し、各ホールともそれを模索しながら少しでも理想的なホールづくりを目指しているというのが実情である。

換言すれば、いかに緻密な計画づくりに取り組むか、どれだけ明確な目標を持つことができるか、多様で複雑に絡み合う諸条件に対していかに柔軟に対処し、その中から具体的な解決策を見いだしていくことができるか、といったことが、計画づくりの正否を握る最大のポイントといえよう。本調査で明らかになった現状や課題、また調査結果から分析・整理した計画の進め方や留意事項は、そうした基本姿勢をサポートするものであり、ホールの計画づくりに際して、最低限視野に入れておくべきことがらといえる。

公共ホールの建設ラッシュが始まって久しい。現在、全国には約2,500館の公共ホールが存在している。一時に比べて新設のペースは衰えたが、それでも計画中のホール、あるいはこれから計画されるホールの数は依然として相当数にのぼっている。今回の調査では、公共ホールが、その運営や活動によって地域に大きな活力を与えることができるように、ホールづくりのプロセス自体にも地域に大きなインパクトをもたらす可能性を持っていることが明らかになった。そういう意味で、ホールの計画づくりのあり方は、開館後の運営と同様に重要であり、極論すれば、ホールの計画づくりを開始した時点で、すでにホールの運営は始まっているといった基本的な認識が、ホールの計画づくりには求められているといえよう。

図表 II-3 ホールの計画づくりの流れ(モデルプラン)

